P-19

日琉祖語*s に対応する南琉球八重山諸語の破擦音から考える音変化の自然性

中澤光平・麻生玲子
（信州大学・名桜大学）

【要旨】沖縄県の八重山諸島で伝統的に話されている言語である南琉球八重山諸語の一部では日琉祖語のサ行子音に破擦音が対応する。この対応を分析した結果，破擦音の対応は「与那国型」と「八重山型」に大きく分類することができ，対応をもとに八重山諸語で起きた音変化を推定すると，「破擦音＞摩擦音」ではなく「摩擦音＞破擦音」という一見不自然な方向の変化が生じたと考えられることを示した。最後に，破擦化という不自然な音変化が生じた背景には，八重山諸語に特徴的な帯気化，無声化が関わっている可能性を述べた。

1. 本発表の目的

沖縄県の八重山諸島で伝統的に話されている言語である南琉球八重山諸語の一部では日琉祖語のサ行子音に破擦音が対応する。本研究は，この対応から推定される音変化が「摩擦音＞破擦音」という一見不自然な方向の変化であることを示すとともに，不自然な音変化が生じた背景と音変化の通言語的な自然性について論ずることを目的とする。

2 節で考察の対象とする方言と音声について述べる。3 節で扱うデータと分析結果を示す。4 節で分析結果に基づいて音変化について考察する。5 節で本研究のまとめと今後の課題を挙げる。

2. 背景と問題の所在

南琉球八重山諸語では，日琉祖語（pJ）のサ行子音（*s）に破擦音が対応することがある。

(1) a. 共通語 :: 波照間方言　kusa :: fuca [fu˳tsa]「草」，kasa :: kaca「笠」
　　b. 共通語 :: 与那国方言　kuse :: huCi [ɸutʔʃi]「癖」，usi :: uCi「牛」

波照間方言と与那国方言では，(1) で挙げた例以外にもサ行子音と破擦音との対応例が多く見つかる一方，石垣島伊原間方言，竹富島方言，黒島方言などでは限られた語彙にしか破擦音が対応しない。波照間方言と与那国方言では単に対応例が多いだけでなく対応が非常に規則的であり，破擦音が対応する条件も，波照間方言であれば「サ行子音に無声化母音が先行する環境」（cf. 大野 1989: 10）と明確であることから，この対応は音変化の結果と考えられる。

しかし，変化の方向が「摩擦音＞破擦音」（破擦化）なのか「破擦音＞摩擦音」（摩擦化）なのかは明らかでない。音変化としては破擦化，摩擦化のどちらの可能性も考えられるが，どちらがより自然な変化かという「自然性」の観点から言えば，摩擦化は弱化（lenition）という一般的変化である（cf. Bybee 2015: 43）ため，破擦化より摩擦化の方が自然な変化であると言える。

ところが，pJ *s に八重山諸語の破擦音が対応する例では，共通語を含む日琉諸語の大多数でサ行子音が摩擦音 [s]~[ʃ] であることから，多数決の原則によれば祖語でも摩擦音 [s]~[ʃ] であり，八重山諸語で破擦化が起きたと考えるべきであるが，破擦化は強化（fortition）と考えられる点で自然な変化とは言えない。一方で，八重山諸語の [ts] ~ [tʃ] が pJ *s の本来の音価 [ts] (~ [tʃ]) の保持であり，その他の日

琉諸語で [s]~[ʃ] に摩擦化したと考えると，音変化の方向としては自然であるが，日琉諸語のほぼ全ての環境で並行的に[ts] > [s] が生じたと考えなければならず，この点で自然とは言えない可能性がある。

なお，(1) の語の他の琉球諸語での対応は表 1 のようになっている。

表 1　琉球諸語での pJ *s の対応

言語 ＼ pJ	*kusa「草」	*kasa「笠」	*kuse「癖」	*usi「牛」
大和浜（奄美大島）	k’usa	k‘asa	k’uʃɛ	ʔuʃi
東区（与論島）	kusa	hasa	kuʃi	uʃi
今帰仁（沖縄本島）	kʰusa:	hasa:	kʰuʃi:	ɸuʃi:
首里（沖縄本島）	kusa	kasa	kuʃi	ʔuʃi
仲地（伊良部島）	fu̥sa	ND	fu̥ʃi	usï
仲筋（多良間島）	fuɕa	kaɕa	fuɕi	usɿ
四箇（石垣島）	ɸu̥sa	kasa	ɸuʃi	ʔusï
祖納（西表島）	ɸú̥sa	kḁsḁ	ɸŭʃi	uʃi

参照した資料（書名のみ）

大和浜（奄美大島）:『奄美方言分類辞典（上・下）』，東区（与論）:『与論方言辞典』，今帰仁（沖縄）:『沖縄今帰仁方言辞典』，首里（沖縄）:『国立国語研究所資料集 5　沖縄語辞典』（9 刷），仲地（伊良部島）:『宮古伊良部方言辞典』，仲筋（多良間島）:『南琉球宮古語多良間方言辞典』，四箇（石垣島）:『石垣方言辞典』，祖納（西表島）:『西表方言集』

表 1 のように，いずれの方言も pJ *s に摩擦音が対応している。

変化を記録する資料がない場合，当該の変化の自然性だけでなく，関連する変化との関係（連鎖，対立）や，音変化の生じる環境にも注目しなければならない。つまり，音変化の自然性には，音変化自体の自然性と過程の自然性とがあり，この 2 つが矛盾する場合にどちらを重視するかなど，変化の妥当性については総合的に考える必要がある。

本研究は，pJ *s と八重山諸語の破擦音との対応を分析し，音変化の自然性について議論，考察を深めることを目的とする。

3.　データと分析

本節では，分析に用いるデータとその分析結果を示す。

3.1　データ概要

公刊されている方言資料を基に，pJ *s を含む 95 語を中心とした 160 語を調査対象とした。祖形はセリック他（2024）の琉球祖語形を参考に発表者らが再建した形式による。また，資料の収集にあたり，Celik et.al (2022) の検索システム（非公開）を利用した。

調査対象とした *pJ *s を含む 95 語を (2) に示す。

(2) pJ *s を含む調査語彙リスト

*asa-「浅い」，*ase「汗」，*asebo「汗疹」，*asida「下駄」，*asita「明日」，*gasi+dosi「凶作の年」，*gosaN「杖」，*gusi「串」，*ikusa「戦」，*isi「石」，*jasu-「安い」，*kabuse-「被せる」，*kajusa-「擽ったい」，*kasa「笠」，*kasa「瘡」，*kasam-「嵩む」，*kasanai「負んぶ」，*kasanaje-「背負う」，*kasei「加勢」，*kasiki「おこわ」，*kasimasi-「姦しい」，*kasuguri「痰」，*keisatu「警察」，*kesa「先刻」，*kisasa「シラミの卵」，*kiseri「キセル」，*kisi「崖」，*kos-「越す」，*kosamek-「憤慨する」，*koseu「トウガラシ」，*kosi「腰」，*kotosi「今年」，*kudas-「(腹を）下す」，*kurosima「黒島」，*kusa「草」，*kusa「フィラリア」，*kusa-「臭い」，*kusabi「ベラ」，*kusabi「楔」，*kusare-「腐る」，*kuse「癖」，*kusi「櫛」，*kuso「糞」，*kusuri「薬」，*miso「味噌」，*musi「虫」，*musiro「筵」，*napasiro「苗代」，*nisi「北」，*padukasi-「恥ずかしい」，*pasam-「挟む」，*pasami「ハサミ」，*pasi「橋」，*pasi「箸」，*pauki+posi「ほうき星」，*pirumasi-「不思議だ」，*pise「干瀬」，*pise「栓」，*pisu-「薄い」，*pos-「干す」，*posi「星」，*poso「臍」，*puseg-「防ぐ」，*pusi「節」，*pusoku「不足」，*sas-「刺す」，*sase「錠」，*sirabo「白保」，*sirage「白髪」，*siram-「色があせる」，*sirami「虱」，*sirare-「申し上げる」，*siro-「白い」，*sisi「獅子」，*sita+siki「輪手拭い」，*sodate-「育てる」，*sogari「身なり」，*sora「先端」，*suso「裾」，*sosor-「拭く」，*su-「酸っぱい」，*susu「煤」，*sute-「捨てる」，*tamasi「魂」，*tamasi「割り当て」，*te+sazi「手拭い」，*toisi (?)「砥石」，*tosi「年」，*tukasa「司」，*turi+sagar-「垂れ下がる」，*tutusim-「慎む」，*usi「牛」，*usiro「後頭部」，*usu「臼」，*wasure-「忘れる」

3.2 分析結果

(2) の pJ *s で破擦化が観察されるかを確認したところ，与那国方言を含む八重山方言は次のパターンに分類されることになった。

(3) pJ *s の対応に基づく八重山諸語の分類

a. 与那国型…与那国

b. 八重山型 A…波照間，宮良，小浜島

c. 八重山型 B…竹富島，黒島，鳩間島

d. その他…石垣島四箇，桴海，川平，新城島，西表島祖納，古見

(3a) と (3b) は 多くの語で破擦音が見られるが, 対応の条件が (3a) と (3b) とで異なる。(3c) は (3b) と破擦音が対応する条件は同じであるものの，語彙的であり語数が極めて限られる。(3d) は破擦音が対応する例が（ほとんど）見られない。

与那国型の条件は中澤（2022）でまとめたように，(4) の 2 つの場合である。

(4) a. $*C_{[-voice]}V_{[+high]}s$- 〔例〕iKuCa「戦争」，Cu「糞」，Curi「薬」，Ciri「キセル」，…

b. $*sV_{[+high]}$ 〔例〕huCi「星」，Cima「島」，Cini「脛」，CiCi「肉」，CiCi「煤」，…

八重山型の条件は (5) の通り。〔例〕は波照間方言。

(5) $*C_{[-voice]}Vs$- 〔例〕fuca「草」，pacan「鋏」，tucï「年」，kucï「腰」，pucï「星」，…

両者は重なる部分もあるが違いもある。例えば，*usi「牛」，*usu「臼」，*nisi「北」などは与那国型では破擦音が対応する（〔例〕与那国 uCi, uCi, niCi）が八重山型では破擦音が対応せず，*kasa「笠」，*poso「臍」，*pasami「鋏」などは八重山型では破擦音が対応する（〔例〕波照間 kaca, pucu, pacan）が与那国型では破擦音が対応しない。

宮良方言と小浜方言も波照間方言に準じて破擦音が対応する。

(6) 小浜方言の例

*kasa「笠」*kạtsa*，*kuse「癖」*fụtʃi*，*kosi「腰」*kụtsɨ*，*kusi「櫛」*fụtsɨ*，*kusuri「薬」*ɸụtʃìrɨ*，*pasi「橋」*pạtsɨ*，*pasi「箸」*pạtsɨ*，*posi「星」*pụtsɨ*，*poso「臍」*pụtsoːma*

竹富方言，黒島方言，鳩間方言でも，(4b) ほどではないものの，破擦音が対応する例が見つかった。

(7) 竹富方言の例

*kasei「加勢」*kəʃi*, *kətʃi*，*kasimasi-「姦しい」*kətʃaːsəŋ*，*kosi「腰」*kuʃi*, *kutʃi*，*koseu「トウガラシ」*kuʃu*, *kutʃu*，*pasi「箸」*pətʃi*，*pise「栓」*pitʃi*，*kusi「櫛」*putʃi*，*kuse「癖」*ɸutʃi*，*poso「臍」*pụtsu*，*pos-「干す」*putsuŋ*，*kurosima「黒島」*putʃəː*

(7) に示したように，竹富方言では摩擦音と破擦音の両方に対応する例がいくつが見られた。

4. 考察

本節では，3 節の結果から，破擦化（[s] > [ts]）と摩擦化（[ts] > [s]）のどちらの可能性の方が妥当かを検討し，変化の要因について考察する。

4.1 破擦化か摩擦化か

3 節で示したように，破擦音が対応する条件は与那国型と八重山型で大きく異なることから，並行変化であることがわかる。

与那国方言の場合，破擦音を古形とは見なしがたく（cf. 中澤 2022），[s] を経てから破擦化したと考えられるが，八重山諸語の破擦音は *s [ts] が保持された可能性も考えられる。そのため，破擦音が保持か改新か，波照間方言をもとに考察する。

pJ *s [ts] だとすれば，無声化母音の後で [ts] が保持され，それ以外の環境では摩擦化したことになり，pJ *s [s] だとすれば，無声化母音の後で [ts] と破擦化したことになる。両者を比べた場合，摩擦化の方が自然な変化のため pJ *s [ts] を採るべきことになるが，他の変化との関連を検討する必要がある。

破擦化と見た場合，無声化母音の後という限られた環境でのみ元の音価が保持されているというのは若干問題があるようにも思われるが，例えば首里方言でも *ɸipusaɴ*「粘り強い」のような限られた語（環境）で語中の p が見られるということがあるため，ごく一部の環境でのみ古音が保持されたと見ること自体には問題はないと考えられる。

波照間方言では，pJ *ti, *tu に /cï/ が対応する（大野 1989: 9）。そのため，pJ *s に破擦音が対応しない環境では pJ *ti, *tu と pJ *si, *su が対立する。

(8) a. pJ *ti, *tu : *macï*「町」，*mucï*「餅」，*nacï*「夏」，*macï*「松」
b. pJ *si, *su : *usï*「牛」，*basï*「鷲」，*musï*「虫」，*usï*「臼」

pJ *s [ts] だとすれば，対立を保持するためには pJ *ti, *tu が破擦化する前に pJ *si, *su が摩擦化する必要がある。つまり，早い段階での摩擦化を保持でも想定しなければならない。

また，*itutu「五つ」は波照間方言で *issi* になる。これは*itutu が恐らく異化によって*isutu (OH *isïcï) になったためと考えられる（OH は古波照間方言形の意で，現在の形より古い段階を表す）。OH *sVcV は s(s)V に対応することがある。

(9) *sute-「捨てる」*ssirun*，*te+sazi「手拭」sissi

*sute-「捨てる」は OH *sïci- > *ssi-*，*te+sazi「手拭」は OH *ci+saci > *sissi* と考えられる。この変化は OH *sïci- [sïtʃi-]，OH *ci+saci [tʃi(:)sạtʃi] のような段階を想定する必要があるが，pJ *s [ts] の立場では*sas-「刺す」 > *sacun* に想定される [tsạts-] > [sạts-] がなぜ (9) の変化と供給関係にないのか説明ができない。

これに対し，波照間方言でも *s [s] の段階があったと考えれば，破擦音に対応するのは破擦化という改新になるため，上記の問題が起こらない。*sute- > sïci- > s*ssirun*，*tesazi > cisaci> *sissi* という母音脱落が起こった後，*sas- > *sacun* という破擦化が生じたと考えればよい。

波照間方言には他に *sirami「虱」*ssan*，*sirage「白髪」*ssee* などの対応もあるが，これも *sir- > sïr- [sï̥ɪ̥] > ss- という母音脱落と認めれば，*OH sV̥s- > sV̥c という変化とは供給関係にないため問題がない。つまり，他の変化との関係を考えた場合，破擦化（[s] > [ts]）の方が摩擦化（[ts] > [s]）より問題が少ないと言える。

破擦音が破擦化という改新だとすれば，波照間方言の kafucirun「被せる」（*kabuse-），nifucahan「遅い」（*nibu-）も説明がしやすい。つまり，*kabuse- > kav(u)se- > kaf(ṵ)se-，*nibu- > niv(u)- > nif(ṵ)-のように v > f の変則変化の後に無声化母音によって /s/ > /c/ となったと考えればよい。保持と考えた場合，この環境で [ts] が保たれたことを説明することは困難である。

他の八重山諸語も，破擦化が生じる条件は波照間方言と同様であることから，波照間方言でのみ pJ *s [ts] > [s] が生じたと考えるより，*pJ s [s] であったと考えた方が無駄がない。八重山諸語以外の琉球諸語では摩擦音であることから，少なくとも琉球祖語の段階で *s [s] だったと見るべきだろう。

ただし，[ts] > [s] が並行変化として起こった可能性も考えられる。日琉祖語のハ行子音では [p] > [ɸ] > [h] が日琉諸語で並行的に起きたと考えられるため，サ行も同様に [ts] > [s] が広く起こった可能性があるが，ハ行では [p] を保持する言語が（本土の一部の方言を含め）複数見られるのに対し，サ行では破擦音を保持したと見なされるのが一部の八重山諸語の一部の環境だけとなる点が異なる。

4.2 なぜ破擦化が生じたのか

破擦化は音変化としては摩擦化よりも不自然な変化であり，なぜそのような変化が生じたかを考える必要がある。

他の日琉諸語でも破擦化を含む強化は観察される（平子他 2024: 29）が，弱化に比べて多くはない。ところが，八重山諸語では破擦化以外にも [ɸ] > [p]（〔例〕竹富方言 ppə「倉」cf.与那国方言 hura）とい

った強化が広く観察される。つまり，八重山では強化が生じやすい何らかの特徴がある可能性を考える必要がある。八重山諸語に見られる特徴は，子音の帯気化あるいは母音の無声化が盛んであることが挙げられる。破擦化が起きているのに帯気化や無声化が関わる可能性を検討する必要がある。

5. まとめ

本研究では，八重山諸語に見られる日琉祖語 *s と破擦音との対応から，破擦化（[s]＞[ts]）と摩擦化（[ts]＞[s]）のどちらの方が妥当かを検討した。他の変化との関係から，摩擦化ではなく破擦化が起きたと考えられることを示し，なぜ破擦化という一見不自然な変化が生じたのかについても考察し，八重山諸語に特徴的な帯気化，無声化が破擦化を起こした可能性を指摘した。

ただし，後者については可能性を指摘したにすぎず，検討はこれから行う必要がある。他言語に類例はあるか，両者の関係について音声学的に説明できるかなどは今後の課題である。

謝辞・付記

本研究は，次の日本学術振興会科学研究費による助成を受けた研究の研究成果の一部である。若手研究「日本語諸方言の接触地域における系統関係の解明」（研究課題 : 21K12993 ; 研究代表者 : 中澤光平），若手研究「琉球諸語を対象とした効率的かつ大規模な言語資料収集・蓄積方法に関するメタ研究」（研究課題：23K12167；研究代表者：麻生玲子），挑戦的研究(萌芽)「遺伝系統樹と言語系統樹の矛盾を検討する」（研究課題：23K17503；研究代表者：松波雅俊）

参照文献

Bybee, Joan (2015) Language Change. Cambrige University Press.／CELIK Kenan, NAKAZAWA Kohei, ASO Reiko (2022) A proto-Ryukyuan Database: an aggregating model of dialectal lexical data. In: Methods XVII／セリック ケナン・麻生玲子・中澤光平（2023）「八重山祖語の系列再建に向けた小浜方言の AB/C の所属資料」『アジア・アフリカ言語文化研究』106 : 111–131.／池間苗（1998）『与那国ことば辞典』（私家版）.／大野眞男（1989）「琉球波照間方言の音対応と音変化」『岩手大学教育学部研究年報』48(2): 1–17.／石垣實佳（2013）『メーラムニ用語便覧』南山舎.／川平村の歴史編纂委員会（2021）『新版川平村の歴史』川平公民館.／加治工真市（1998）「古見方言の基礎語彙」『沖縄芸術の科学 : 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』10 : 265–320.／加治工真市（2012）「続古見方言の基礎語彙」『琉球の方言』36 : 29–55.／加治工真市（2013）「続古見方言の基礎語彙（2）」『琉球の方言』37 : 87–107.／加治工真市（2014）「続古見方言の基礎語彙（3）」『琉球の方言』38 : 157–178.／加治工真市（2020）『鳩間方言辞典』国立国語研究所.／かりまたしげひさ（2009）「竹富町黒島東筋方言の音韻体系と音韻変化（おぼえがき）」沖縄言語研究センター2009 年度 4 月例会（2009 年 4 月 18 日）発表資料.／國學院大學日本文化研究所（1992）『南琉球新城島の方言』國學院大學日本文化研究所.／セリック ケナン・麻生玲子・中澤光平（2022）「南琉球八重山語宮良方言の名詞アクセント資料」『国立国語研究所論集』22 : 157–176.／セリック ケナン・麻生玲子・中澤光平（2023）「南琉球八重山語波照間方言辞典に関する中間報告」『言語記述論集』.／セリック ケナン・中澤 光平・麻生 玲子（2024）「［関連データ］「琉球祖語の再建に向けた比較データ構築用の枠組提案（UniCog）」の関連データ」『国立国語研究所論集』26.／中澤光平（2022a）「与那国方言の音韻変化と形態変化」『国立国語研究所論集』22: 89–111.／西岡敏（2000）「石垣島北部方言の体言基礎語彙」『琉球の方言』24 : 37–56／平子達也・五十嵐陽介・トマ ペラール（2024）『日本語・琉球諸語による歴史比較言語学』岩波書店.／法政大学沖縄文化研究所（1975）「八重山石垣島川平方言」『琉球の方言』1 : 1–102.／前新透（2011）『竹富方言辞典』南山舎.／前大用安（2002）『西表方言集』（私家版）.／宮城信勇（2003）『石垣方言辞典』沖縄タイムス社.／与那国方言辞典編集委員会（2019）『どぅなんむぬい辞典』与那国町役場.／